

(1) 演習についての基本的な考え

大学は、他者から「教わる」場（空間）ではなく自らが「学ぶ」場である。

なかでも演習は、自らが選んだ課題・テーマについて、自らの意思に基づき学習、研究する活動である。

3年間の演習を通して自らが選んだ課題・テーマを達成することを求める。

大学で受講する他の講義はもとより、学習では、自学自習の反復と継続とが高い成果を生むと考える。

したがって、演習として大学の時間割に配置された90分間は「あってないもの」と考える。

（注）「あってないもの」とは、次のようなことである。

演習を履修登録すると、つつい時間割上の「演習」のみを学習時間と考えがちである。

ところが自らの目標達成にとって有効なのは、目標達成に向けた自律した活動（自学自習）である。

時間割上の演習時間は、学習の場ではなく、日ごとの成果を報告し、他者から評価を受ける場である。

これが、時間割上の「演習」を「あってないもの」とする理由である。

(2) 演習を通して実現をめざすことがら

自らが達成をめざすことがらは、演習履修者自らが、自らの意思で決めることとする。

実現をめざすことがらの条件は、次のとおりである（①または②、あるいは①と②の複合）。

① 3年後に、ある程度の成果を達成できるであろうもの

② 3年間に、徐々に能力を高めることができるであろうもの

但し、次のような目標実現を直接めざすものは認めない（結果として達成することは否定しない）。

TOEICなどの語学能力向上・会計士などの資格試験受験対策・SPI対策などの就職準備活動など。

(3) 本を読むこと

演習の基本として、できるだけ多くの本を読むことを求める（具体的な内容は裏面参照）。

なにごとであれ、「量」を抜きにして「質」を語ることはできない。

人間の筋肉を鍛えるには、一定量の筋力トレーニングが必要である。

一定量の負荷をかけることなしに、また、トレーニングの反復・継続なしに筋肉を鍛えることはできない。

肉体の一部である脳も同じである。学習とは、脳の「筋肉？細胞？」を強化することにほかならない。

一定量の読書を反復し、継続することは、肉体としての「脳」を鍛えるトレーニング方法のひとつである。

以上の考えに基づき、一定量の読書を継続することを要求する。

(4) 演習にともなう費用（コスト：時間コスト・貨幣コストなど）負担について

先に述べたように、時間割上の「演習」時間は「あってないもの」である。

「演習時間」は、通常の講義時間と異なり、学習や知識を獲得する時間ではない。

自らが習得した知識や情報をもちより、参加者で共有し、互いに錬磨する時間である。

演習参加者に求められるのは、他者に提示し、共有するに値する知識や情報を習得することである。

知識や情報獲得のための自学自習には、「時間を使うこと」「自分自身に投資すること」が必要となる。

こうした負担を回避するような姿勢では、なにごとであれ、十分な成果を達成することは不可能である。

本演習を選択することは、必要な負担を自覚し、了解し、覚悟した上での決断であると理解する。

(5) 現在、ゼミ在籍者はいない（2011年9月現在）。

このような現状なので、ゼミ合宿・コンパ等はまったく実施していない。

(6) 演習についての質問（とそれへの回答）の機会について

質問や説明を希望する学生は、教育サポート室（3階）受付に申し出る。

申し出に基づいて、適宜、質問と説明の機会をつくる。

「ゼミ説明会」は、まったく設定してしない。ゼミ見学もない。

(7) 「やる気」や「意欲」、「志」について

演習履修希望者に対し、いわゆる「やる気」や「意欲」、「志」などを求めることは、まったくない。

必要なのは、これら口先だけの「精神」ではなく、継続的な自学自習の「行動＝習慣」である。

「志」などという言葉、幾ばくかのとまどいとためらいそして羞じらいなしに、

口の端にのぼすことができる者には、他ゼミ履修を薦めることをためらわない。

(8) 就職について

担当教員による就職斡旋や企業紹介はまったくおこなわない。就職活動に配慮した時間変更等も行わない。

就職についての活動や支援、情報入手などは、多摩大学キャリア支援センターに一任する。

【付記】 履修者選抜に際し、剣術、空手、少林拳法など武術（柔道を除く）経験者に配慮する。